

が嶽稜々として天よ昇へ南は鷹取山とて天竺の雞足山の如く西の七面山とて鉄門に似たり東は天子が嶽たかく雲を帯また北に早川南に波木井川東に富士川西に大白川この四の山四の流れの中央の身延山にしてそのうちも掌ばかりの平地ありこゝは菊野御菴室は高祖大士朝に日天子を拜し日課として御經一卷その餘方便壽量勸持寶塔など御意にまがせて讀誦あり日中よりは徒弟檀越のために一乘の妙理を御演説夕景よと一座の僧俗を圓居て淨題目の御修行なり夜はこどさらに觀念の床よ一念三千の妙境を觀下但見妙事の夢を結ひたまへを妻戀鹿のよびまきりに御眠をさま一我等一切衆生我が身のうちに三觀一心の月曇りなく澄けるを無明深重の雲よひさ覆われ流轉生死の凡夫と迷ひ果し事を思召さしめて和歌を詠給ふ

たち渡る身のうき雲もいれぬべし妙の御法の熱の山風と遊ばして佛乘を讚歎を給ひき高祖此山に御入ありてより歸依檀越の布施を受るとを願はず法子に命て山麓を鋤て粟を蒔菜を植専一耕作を旨とし樵の實を採柴粟を拾ひ四季折々の木の實を貯へ給ふ波木井殿もその御心を察一人知す麥稗大豆なよくれと密よ香厨に入置て大士よえらせず又高祖大士は御馬を好ませ給へばとて御菴室の側に厩を立たくましましき馬を繫で其御意を慰め奉るまことや如意寶樹は萬の寶を降す遠國近郷をいはず信心歸依の方より日よ夜よ衣食財産の供養雨降り雪と積天上の福天八界の長者とぞれもいれける一日天氣快晴さればとて兩三人の法子を伴ひ荆棘を拂ひ穢穢を踏

んで身延の峰に攀登給へば長天雲消て眺望かぎりなく東の方遙かに見やり給へば伊豆相摸の山々を越て一筆ひける淡墨の如きは房州の岬なり大士思はず御袖をしぼり故山の空なつかしく両親の在せし昔を思ひ出しはし御經遊ばしけるが此峰は御庵室よりは五十餘町天の梯道もなき險阻なりしを折々こゝに登り御両親の廟墓を遙拜し追慕の泪をそそぎ給ひける大舜は五十にして父母を慕ふ大士六十にして二親を戀させ給ひき内外兩典もと二つなく大聖至聖其道一なりとぞ思はれける此古蹟を奥の院と稱え今に思親閣育恩堂の名を残せりけふしも上野なる南條兵衛殿酒二筒椰子一籠菓蕪蕪薯牛蒡品々を家の僕にもたらしつ御庵室に訪奉りて此程大元蒙古九州におし寄天下の大事に及びたるその顛末語られけるこゝに去る十月の五日對馬國上縣郡國外八幡宮の神殿より火焰立上こと數十丈國中これを見て出火ならんと馳聚たるに何事なしこれいかなる事の前表にやといふ問もなく其日の申刻對馬西の海上黒みわたり蒙古の世祖忽必烈の命として鳳州の經略史忻都を大將として高麗の總官洪茶丘を先陣として其勢合二萬五千餘人兵船九百餘艘當國佐須の浦に押寄たり此津の守護代相馬之允助國手勢を引て馳向ふ處着岸なしたる七八艘軍卒凡一千ばかり陸に上りて守護代が陣へ押かゝる相馬父子其外宗徒の者討死して敗軍に及ぶ蒙古の賊軍處々に火を放て狼藉すこのよし對馬より博多に註進す同十四日壹岐國に取詰赤き旗をひらめかして上陸し嚴しく攻伐にぞ當國の守護平左衛門尉景隆協すして城内に自害して

相果たり賊軍勝に乗て筑前今津より箱田箱崎に通る九州には東條大友白杵松浦の面々菊池原田
 兒玉の一黨備へを繰出して合戦を挑めども賊軍は進退自在の修練といひ殊に陣中より雷電のひ
 いきをなして大ひなる鉄の玉を飛す我が軍兵その玉に當れば粉の如く打碎かれ又燒爛るもの數
 を知らず忽ち蒙古に追立られて敗走す菊池次郎康成赤坂の松原に踏とまりけりども一支もこ
 らへず廿九日に至て東郷覺忠の子三郎景資大友直泰難波在助菊池康成を始め討死の勇士おびた
 いしく今は誰有てこれを防ぐものなく蒙古は八方に亂妨し男をば打殺し婦は縛て船へ送る民百
 姓逃惑ひ山中の樹の茂り谷間ひ岩蔭に親子兄弟聲を呑氣息をつめてひそみ隠れたれども炊きの
 煙りを見て賊卒ども其隠家を探しあくるにぞ是非なく米を咬水を飲で日を送ることに哀なるは
 斯山中に隠れたるをも赤兒の啼聲に尋ね出さるゝゆゑ家内七八人の命には替がたしとて兒を生
 理にし谷川へ流したるも多かりけるとぞさればこれらの有様を聴畏して親を負子を懐にして足
 を限りに逃去て此三四十里の海岸には居るもの絶へて一人もなしとてにおいて賊軍ども心のま
 りに金銀米穀を取あつめ九百餘艘に積入ていつしか出帆して残りなく歸りしを知る人さらにな
 かりける京都鎌倉には合戦の用意とりくにありしも今は徒となり此うへはいかなる世にか
 成ゆくらんと上下万人浮雲の思ひに住しけるかゝる天下の騷亂も安國論に符台なすをもて法弟
 禮越はいよく信心の色を增高祖大士は浮世の安危を余所に見て此身延の澤に光をかくし讀經

唱題の外さらに他事なくわいけるこゝも房州天津なる光日尼遠く使を奉り我が子彌四郎を
 主人の爲人人を討て自殺なしたるより布施をさへげて回向を願ふも其彌四郎も一度我が教化
 を受たるものなりとて懇に追福を替み給ひけり又今日ねとづれたるの椎池四郎とて鎌倉司船
 の官吏なるが深く大士を歸依しいま遠く安否を此山に訪奉る時に波木井殿ひとりの尼を伴ひ來
 りこの我が養女にて駿州江尻七村の邑主村岡民部に嫁したるが今の夫婦も別れて剃髮せりと
 て受戒を願ふ妙圓日義と法名を賜ふ文永十一年も雪の中も暮て明れば建治元年乙亥二月十六日
 房州東條の新尼より使をもつて布施を奉り甘海苔一袋をそへたり大士これを見そなはし我幼
 かりととき悲母小湊の磯に此海苔を搔給ひしを稚心にねばへたり海苔の色香の今も同一けれ
 ども愛世のさまのかかり果たるなど御書を認て贈り給ふ春も半途は過ながら山家の遅き梅の
 花や、咲匂ふ香をどして日朗聖人ひとりの兒を携へて登山し春の壽詞餘寒の挨拶いひのぶれ
 大士珍喜斜ならず寒さ凌げど波木井よりこれこゝたる油の如き味酒に幸ひ肴に土當歸昆布の煮
 たるもありと土器出してもてなし給ふ日朗聖人の會釋して此兒の下總國葛飾郡平賀忠時の一
 子にて名を萬壽磨とよびいへるが此月の初めつかた其父携來て徒弟となしてよどありしへ
 許して比企よとどめいしたれ今年七歳に齡ませて未頼く覺ゆるぞ法師の見參にも入受戒をも
 願いんと遙く伴ひ登りしといひ述るを大士は兒が手を取て膝根に居らしめ給ひ空觀骨格凡人

ならんこれ我が弟子なり必ず我が法を弘むべしと御經を戴かせ今日より經一磨と喚んぞとて其儘身延山よとせめれき學問修行怠らず聰明絶倫にありけるが後年肥後阿蘇梨日像聖人として法を京都に弘め給ひ一は此兒にぞ在ける卯月十六日佐渡國より中興入道信重身延山に登て一の谷ある法華堂も今の寺となりぬ寺號をつけてたまのれと願ふにぞ大士妙法華山妙照寺と云るして給ひけり此五月大蒙古國又杜世忠を使として日本と和睦せんことを言越たるを大宰府より鎌倉に送りけれども事ならずして歸國せしよ一駿州の大内安清來ての物語なり此頃高祖は撰時抄二卷を著して大法流布の必を時又依ことを去たしめ鎌倉の御弟に贈り給ふ折から下總太田の會谷次郎左衛門教信先年佐渡より渡り給ひ一觀心本尊抄を拜み迹門無得道といふ文を見謬り法華經の前半分をば讀ますとといふ富木殿種々に言諭せども心解す困りて十月三日此事を身延に告奉る大士直筆を採てそと不相傳の感ひなるよ一細々去たため得意抄と名づけて是を送り給ふ會谷教信深く先非を悔みたり在世の時既斯のごと一十歳後十九年中老天目聖人勝劣の義を立てより八十餘年の間に諸派の勝劣さそひ撥り本化一味の海も多端の波を發したる事歎かひくぞ思ひれける又佐渡に在りたる時徒弟に屬たりし最蓮坊日淨その身の罪も御赦免ありとて御後を慕ひこの山に來り程ちかき下山といふ里に菴を結び日夜に高祖を訪まらせ法を聞とを身の樂とせりその遺跡のこりて下山長榮山本國寺といふなり櫓の柱に這葛もいろづく秋の末

つかた庭の切戸より入來る人あり誰そとあやしみ見玉へばさいつ頃法論にうち負て膝を折たる小室の山伏善智法印手に提重を持たながら席につき一別以來の應答も眞綿に針のねんころ振こは愚妻が手搗の餅たへて久しき音信のしるしに携へはべるかし味なくもきこしめせとさし出すを高祖はよろこばきよし應へつゝ庭に馴ふす白狗を繰端たいて來々とよび此餅ひと以投與へ給へば尾を搖ながら咲ふと見へしが忽四足をふるはして血を吐て死てけり善智は面色土の如く消も入たき風情にて我先年法門にうち負て口には法弟と名乗ながら心は解ぬ裏表聖人を毒害し奉らんたくも早く知名賢明不測の大聖人ゆるさせ給へと庭におりたち五体を大地へうちつけく懺悔の本心あらはれければ大士も不便におぼしめしそは威惡魔の心に入し業にして御身にたへて答あらし我此頃のよみうたに

おのづから邪にふる雨はあらじ風こそ夜の窓はうつらめと詠たるぞと惡氣入其身の法門より逆即是順の理を教へ名を日傳と賜ひかの狗の横死を憐み卒都婆を立て供養なし給ふ彼の小室の一村もこれを見聞て改宗の者多し善智日傳は家を轉じて寺となし徳永山妙法寺とよび又最初法論の地も寺を建妙石山懸腰寺と稱し其身は身延の山内に移り菴を結んで朝夕大士に事へ奉り身の罪滅を祈りける其地を醍醐谷といひ菴を志摩坊とて今に残れり十一月の末つかた下總國富木殿より鷲目一貫文厚綿の小袖一筆十管墨五挺はるくと贈り越したる歳暮のおとづれに今

年もくれて建治二年丙子の正月雪晴分て南條殿餅七十枚酒一筒芋一駄大根河のりなど春の祝ひにこれを奉る松野氏よりは柑子一籠種々の供養をさしぐ別て此頃春蘭て猷澤なる大井庄司が方より乾柿三箱酢一桶莖立土筆など春の氣色の贈りものに山中もや御心のとがに日を送り玉ふ處に上野殿珍くしも音信玉ひ亡父の追善の布施など取揃へて奉り種々の物語りうち交て法華經は未來の成佛は一定とこそ承れ現世にはさまでの利益は在さぬにやと尋ね玉ふに大士はうち咳嗽たまひいやとよ現世は藁未來は米なり未來の米のよく實る程ならば現世の藁は美事なるべし昔九州に大橋太郎といひし諸侯ありけるが鎌倉右大將家の御勘氣を蒙り鎌倉へ召下しあまりの悪さに土の牢に苦しめ年を経て後に殺せと下知ありける斯までに重き罪とも知らぬ火の筑紫に残る其妻は懷妊してありけるが今は知行も没収せられ一族家來も四散になりゆきてたのむ方なきわび住居歎きのうちに月滿て男子出生有ければ夫の紀念と育揚名を一妙應と呼なして七歳の時に山寺へ登せ手習學問そのうへに夫婦の常に信じ玉ひし法華經を讀ならはし玉ひけるに或日泣々家にかへり母に向ひて尋るやう朋輩の兒達童子等が親なし子よ親なし子と罵り笑ひはべるかし我父はいづくに在すぞ天なくては雨ふらず地なければ草木も生ず我が母ありて父の亡ことやある在すかたを教へて給はれと問見よりも問るゝ母親胸にせき來る血の涙かくし果べき事ならねば涙を押へてさればとよ御身の父太郎殿鎌倉殿の御怒りに値鎖に緊ぎ張興に昇乘られて

彼の地より下り給ふ時御身の此母の胎内よりありて其子の行末頼むと唯一言を此世の名殘をれより絶て音もせず殺され給ひし沙汰もさこへず又生て在す噂もなく夢さへ遠き東路の臈にだにも知よしなく頼む御身たゞひとり父上の朝暮に讀給ひし法華經といふはこの世のちの世淺からぬ功德とさして御身よならぬ一萬よひとつも父上の生て在さば其身の祈禱死たまひなを追善と思ひあきらめはべるか」と語り給へば一妙應のこれより先立かへり一心不亂法華經一部口誦よまでなりければ十二歳のとき母にも告すたゞひとり鎌倉に下向し鶴が岡八幡宮に通夜なして父の安否を知らして給はれと御神前に祈念しつ御經を讀すまゝけるに其音律微妙にして金の鈴を振が如く珠を轉す妙音自在參詣の男女れもいす涙はふり落かへるを忘れて聽聞し神前の群集人の山をぞなしたりけるかゝる處は御臺所政子の方夜に入り御忍にて御參詣あり廻廊より御内陣にすゝんで御拜ありしに折節彼の兒の御經を聞給ひあまりの尊き御歸館有て右大將殿おかくと御物語ありければその明の朝彼の兒を召寄御持佛堂に在いてこれをよまゝ給ふいと不測ある梵音聲骨身も徹る御經の涼き聲にうつゝ、かく御聽聞ありける折から御門外よひかに移しく人聲するよぞ見の驚き御經よみたり左右の人をかへりみてあれ何事ぞと尋るにぞさればとよ今罪人の頸を切とて町々をひき渡すなりといひければ思はず兒の聲を揚て泣けり子細やあらん其を語れと仰ありければ泣々語る父の身のうへはや殺されたまひしや未だ活てまゝす

か八幡大菩薩は御さとしを願はんと此淨經を讀にてはべるなり我父も思ひ合せて人の頸切らる
といふがかなしく覺ゆるありとありければ右大將殿いそぎ梶原景時を召れ前年汝に預けたる
大橋太郎いかがせしやと問給へばその大橋こそ唯今町を引きたり由比が濱にて死罪に行ひ
べるよ一言上を右大將殿いそぎ其罪人を助けよと宣ふにぞ梶原畏て馬を飛せて大橋を連れ來り
大庭より引居たるを見るに十二年土の牢に苦しめられ糸を以て瓦を繋ぎたる様に瘦はそりたるを
ふとさ荒縄よて小手高きいまいめたり右大將殿兒をさし招き給ひその汝が父あるぞ繩をとい
て連戻れ淨經讀たる布施なるぞと仰ありしかば一妙磨の夢かとばかり高椽より飛下りて慈父遺
しと絶りつく太郎もいじめて我が子あるをさし手に手を交す親と子が降の涙の玉殿袖にあたり
て見へにけり御簾の内在まいたる御臺所を始として並居席の大小名泪にくれて詞なし右大將
殿仰にの世も尊き法華經なり我朝敵を退治して父の怨を討今天下は權柄を取て美名を四海に
輝すかとは伊豆國輕が小嶋の配所に在りて法華經八百部を讀し功德なりと昔の經力今の功德ね
もひ合て大橋太郎に本の知行を與へ給へば父子いさんで築紫に下り再び家の榮へたるこれ現
證の利益なりといと長々しき御物語よとるの日脚も短くればへ茲よその日も暮にける同月八日
の事ありと木殿その下九十三歳より逝去ありけりとして自らその遺骨を持て身延に登山し
西祖の引導を願ひて、に塔をたて其寶塔の前にて大士の御手を勞して剃髮し名と常忍日影

お藥のうらよ喜びの泪を交へ下總に歸り給ふに程なく下置左近將監忠晴一子龍王磨を僕の男に
信せて御庵室よ尋奉り聖人の恙なく渡らせ給ふよは途中に富木氏の歸るに値て承はりぬとい
と懇に挨拶していふやう此兒の經一が弟よて今年五歳にいべるが兄を慕ひて泣くらそこれ
宿縁とれもひさだめ法弟の數に願んといるも登りまゐらせたりとありければ大士許して徒治
となく給ふこれ此企谷第三世日輪聖人といひ一學匠なり時に一人の道心遠く房州より來りよ
一封の書通をさし出しける高祖封ねしきりて開き見給ひよ此三月十六日清澄の道善の坊遷
化のよしをえるす大士これを見てかなしみまたへ給はせ去る文永甲子の秋華房にて對面しまる
らせ口に苦かる良藥の我が法門を聞召いさ、か師意を協ひてそれより今も十三年むかへ忘れ
ぬ師の思と縁かへ一つ、その書を額に當て悲み給ひ狐はその住塚を後にせず白龜は毛寶が恩を
報ず畜生すらかくの如し佛法を學んもの報恩の志なかるべしやと別室に籠りて報恩抄二卷を
らひし日向日寶を御使として清澄よつかへ給ふ兩人の道善坊の御墓の前よその書を讀み上て
亡靈を吊ひ兩師また一字一石の經を書經塚を築て歸山し此緒を大士に語り奉りければその御
尊色に顯れけりこゝに日朗聖人の慈母妙一尼遙々身延に登山し種々の供養を奉り佛法の大事を
問ひ給ふ序次此程蒙古よりの使節九人を長門の國司より鎌倉に送りたるを龍の口にて九人の頸
を刎て由比が濱に梟首たるよ道すがらよ聞たるとて語り給にぞ高祖大士の左右の法弟をかへ

りみて鎌倉殿我が言を用ひ給はずそのうへ罪なき異國の使を戮したるの何事ぞや見よ〜災害
 これより起らんと眉をひそめて歎きふ處に池上右衛門大夫宗仲れもひよらず登山有ければ大士
 よろこんでまばらく此山に逗留をす、め給ふ宗仲も大士の御意に背かトどこ、に越臥御側に事
 へけるが大士の常の御膳部に、藜の羹野菜の鹽煮粟稗、乾蕨、炊き糲へたる鹿食をな給ふ
 を見て宗仲頓て家にかへり其妻其子と語ていふやう久しく身延山に在てその朝夕を弄ら
 ざるは厚味を食、衣煖か、襲若て身を安逸とするの菩提の道にあらざ我師末法の導師にて在す
 身の法の爲、其身を苦、め鹿食よさへ猶飽たまはずいと勿躰なく覺ゆるぞわれけふよりこれに
 ならんとして一生その行を、改ず在、けるこ、に駿河富士郡に眞言宗の檀所瀧泉寺といふあり
 その學頭五人身延山に昇て難問と大士一言のもとと説破り給ふ五人の口鉗で啞の如、そのう
 ち一人の僧同郡賀島の住士熱原甚四郎國重の子なりその座をさらして法子とある越後阿闍梨
 日辨といひ、い、是なり又下野坊日忍といふもこの日辨の肉縁の舍弟にぞありける父甚四郎國重
 もこれよりふかく宗門を信、富士郡信者の上頭たり此頃高祖を賀島へ請待なしけるよよつて日
 興上人を名代としてその地よつかり、又日辨日法も共よゆきて其化導を扶け、め給ひければ富
 士の根方にいよく宗風かいやきけりこ、にまた中老日法聖以當國北原の修驗者宥範法印を信
 ひて登山、此山に此の甲戌の春聖人路傍の石に、うちかけて安國論を説給ひ、日を備て録となし

此頃我に隨て得道す願くは師の直弟となし給れとありければ授戒して式部阿闍梨日乘と名づけ
 また住居の寺を安國山立正寺と號し日法聖人を以て開山と定め供養を遂しめ給ひけり又此日乘
 の門派に空存といふ僧あり日乘の事を聞て直さま身延に昇り改宗して徒弟となる蓮明阿闍梨日
 春是也此頃は秋の初風吹立て衣冷しき朝宵のかはる時候の際にや大士は御意例ならず日を経て
 御身惱ましく稱百日余りの病惱にひき籠りて在しけるが四條額基信州殿岡に任てこれを傳へ聞
 急ぎ登山して御脈を診へその藥を調じて歸りけるが其後しはし御音信も聞へず頼基思ひ煩ひて
 殿岡より錢三貫文白米一俵餅五十枚酒大筒一小串の柿五把柘榴の實十箇これを使にもたせ御安
 否を問奉る大士事に喜び給ひ飲食と醫藥にましたる實はあらじ御樂にて所勞も速に平癒し本
 より潔く成はべりぬ今又種々の食物を贈りたまふこれは釋迦佛の貴邊の御身に入替て樂より
 常の食物まで供養し給ふにやと御悦びの御書をおくられる此秋より日興聖人も病ひに依て大
 士にしばしの晩を請伊豆の熱海の温泉に養、して在しけるが此地の走湯山の蓮藏坊博の聞へ
 有ければ一日病の快氣にまかせその人を尋て法論に及び忽に説伏たり其時蓮藏坊の弟子あり
 奥州登米郡新田の領主五郎重綱の子にして頗る才發なり側に在て此問答を聞て改宗し日興聖人
 に伴れて身延山に來り高祖に隨身して名を日目と呼後年日興聖人の命を嘗て當士大石寺に主
 職せりかくて建治三年丁丑の正月帥の阿闍梨日高聖大士に告奉るやう久本坊日元舊冬より病
 苦に閉られ御菴室の奉公見るも苦しげなり我無量罪滅のため一千日の間八役を勤め水を汲薪を

橋て阿私仙人につかへて千歳の修行を爲んとす許し給はんやとありければ大士その心に任せ給ひこれより久本坊に替て給事奉公厚かりける時に下山村の邑主兵庫頭光基といふ人あり一字の堂を營で阿彌陀如來を安置し四幡法印といふ法師を請待して供養を送たりこの僧近來高祖の宗道を信じむたるをもつて其供養に法華經を讀けり下山兵庫甚だ不興にありけるゆへ因幡法師かねて高祖の認めたまひたる一卷の書を取り出して兵庫によましめ又念佛禪の諸經一應は往生成佛のやう見ゆれども實には人を救濟する經にあらざり蓮聖人の歌に

蘆の葉のかたちは船に似たれども難波の人を得しを渡さねと詠たまひしにも其教法は知られはべると深切に説諭すにぞ兵庫ははじめて夢の覺たるごとく改宗して大士の權越となる寺を建て平泉寺といふさても此頃鎌倉大佛門前桑が谷において京都叡山の僧龍象房來て説法し諸宗に法門の不審あらんものは尋ね問るべしとありけるにぞ市中其博學に感じ生佛なりとて日々の群集潮の沸が如しこゝに三位坊日進聖人十九歳折ふし鎌倉にありしが彼の龍象が邪説の鼻を抗いで鎌倉甲の目を覺さんと桑が谷に赴たるに堂内の聽聞人爪をも立ざる參詣なり日進師は縁の端に居てこれを聞居けるに佛法の事に疑ひあらば誰にてもこれへ御渡りあれと再三さこへければ日進公はあまたの人を押分て高坐の前にすゝみ凡佛法は一道にてあるべきを今は諸宗と立わかれ何れを如來の正法とも分がたし後世の大事願はくは教導にあづからん龍象答へていふ諸

宗いづれも正法にして成佛得脱の道なり日進公かさねて宣ふやう聖人は何れも成佛得脱の道とのたまへども佛の御心はしからず一乗の法のみ有て二もなく三もなし又正直に方便教を捨よと説四十餘年の經々は未だ眞實を顯さずとも説給へり聖人の御詞と如來の金言と天地の相違あるはいかんと二言三言の問答にさしつまれば日進公聲はりあげ我は日本第一法華經の行者日蓮聖人の弟子日進といふ雖僧なり夫程の事も辨へなき分際にて人の迷ひを晴さんとの仰は過言なり今より説法やめ給へと喚はら給へば群集の人々おどろきて若きに似合ぬ學僧かな今暫し在して法門を演たまへと諸人すゝめけれども袖を拂てかへり給ふ龍象坊は弱輩の所化に説伏らざる目なくや思ひけん其夜いづちともなく逝失けり後に人の語るを聞に京都の鳥部野にて人の死骸を掘喰ひ叡山を追れて又鎌倉にも近年新墓を掘て人の屍を啖ふとてかしましきも此龍象坊の所爲なりとかやさてしも問答勝利の悦びにひさかへて江間遠江守へ讒言のものありけん島田左衛門山城民部の兩人を御使として四條頼基に仰渡さるゝやう汝頼基六月九日龍象聖人説法の場へ甲冑を帶して狼藉し散々に惡口なしたるよし其身の不覺主家の耻辱なり今日より法華經に心を寄まじきよしの誓狀を書て給るべし其事のならずは知行を沒收し長の暇を取すべしとぞ聞へける頼基驚て應へ給るやう日進坊の問答の場へは稍後れて参りたれと遙隔て聽聞したるのみ惡口狼藉は思ひもよらず定めて讒言のものゝ所爲なるべし其上我法華經を信ずる事は身の得脱

の爲のみならず三代相恩の我が君一門家臣もあまた有て御馬前に忠義を盡すもの其かず多し我は獨君公の後世を永く救ひ奉り未來永々忠勤を盡さんとの志願也唯今命惜さに知行をかなしみ法華經を捨る神文を書ならば重恩の我君忽ち法華經の大怨敵とならせ給ふべし主君大切と存に奉るゆゑ決して書まぬらすべからずとありければ是非なく知行を没収せられ今年三歳なる兒をいだき親子三人流浪の身となり給ひける高祖大士身延山に在てこれを聞たまひ陳狀といふ一書をしたゝめこれを御身の作として主君に捧げたまへとて頼基に贈り給ふ是を頼基陳狀とて祖書祿丙廿九の卷に出たり茲に久本坊日元の妻也とて七歳と五歳との男子兩人を左右に携へ大士に見へあげ夫婦は去る十一月朔日に身まかりはべりしが此兒童等は聖人の徒弟になしてよと今際の遺言なれば將てまいりぬとて潜然と泣大士御法衣の袖をしぼり給ひ兄の日進も學問修行長者しく生立たりとの二人も久本坊が紀念なればとて其儘法弟となし給ふ此兩人後年におよび日善日上とて日善は身延山四代の貫主たり日上は古郷なる甲州今諏訪妙榮山久本寺の開山になり給ひける今年の秋もきのふと暮雪に路絶冬の日池上宗仲の妻紫銅の佛器二具使をもつて遠く供養し奉れば十一月十八日太田乘明の妻室下總より縁裏の小袖ならびに綿を送りまゐらす又同廿八日曾谷入道よりかねて高祖より細字の法華經一部を投與ありしを悦び其御布施として小袖二重爲目十貫文扇子百本をさしげ奉りける一日天朝かに風もなく春ならぬとも日影うらゝかにあ

りければ、透の巖石に坐して一會の説法をなし給ふとき獨の少女年廿歳にこへず柳色の薄衣に濃紅の裳を曳て高坐間近く聽聞せり一坐の人々何ものなりやとあやしみたるに高祖大士説法終りて其少女を顧りみて汝本跡をあらじと仰ありければ桃李の顔も笑を含み我の佛勅をうけて大法守護のためこれより西春氣川の山上又四方八面の嶺を搆へ身の諸佛諸神と同座にて良の一方に安住し利益を七面にひろく圓滿具足を父と一鬼子母を母とする吉祥天女なり聖人願く我に一滴の水を恵みたまはれといふにぞ大士側なる華嶺の水を與へたまひければ晴天俄に雲を起さし美麗かりし少女忽二丈ばかりの蛟龍と現れ金の鱗を聳し鉄の牙を咬鳴し颯と吹來る山嵐渦卷雲に容形をかくし西をさしてぞ飛去けり一座の男女頸を縮め身を震へし其影現の尊形をたしかに拜みたる者もなかりけるとかやこれ未法の鎮守として水火の難劔戟の災を除き利生を万々年顯し給ふ七面大明神これこゝに當國八代郡遠光寺といふ寺あり渡木井の祖父加賀美遠光の香華院なりが此寺の住職宗明和尚は榮西禪師の法弟なりが此頃大士を歸依し改宗して名を日宗と改めたり當國戸田の長遠寺大心阿闍梨も亦これを聞て後れとて眞言を捨て法弟となり名を久成日心と賜ふ此十二月とじめつかたより大雪度々降つゞきければ御庵室の柱撓んで庇を倒したり高祖はかゝる大雪の中に在家の力をかゝる事も便なるとして日與日心なと竹を添繩を結んでその破損を修復せり建治三年もこゝにくれ年改て弘安元年戊寅山中のならひ

雪深く往來とだへし御庵室へ白米一駄鹽一駄芋一駄十字三十枚春の朝の壽として南條殿より
 給この三月十九日より檀越の願として法華經一部の講説を始めたまひこれより日々は懈りなく
 三箇年より成就せり日向聖人御側さらずこれを書といめ給ひ一世に日向記と稱する此聞書
 なりけるけふしも内房の尼富士の一之宮に參詣のかへるさなりとて聖人の御安否を訪奉るよし
 いひ入れれば大士日向師を取次として仰せあるやう神の所從佛の主君ありその從者の神へ參詣
 の序をもて主君の佛を訪たまふと尼御前の御身に取ての罪いと深し今日は見念に入まどかさね
 て訪せたまへとて其儘かへ給ひけるかゝる折から相俣なる正右衛門ありたゞ一騎り來て我
 が妻難産苦しむ聖人救はせ給へどありければ其の前の年我のトめて此地に來りとき途中に
 て粟飯を供養したる妻女なるべとて懇に御祈念ありて護符を與へ給ひまたちまち安産一
 て母も子も恙なく夫婦悦んで種々の供物を獻下其恩徳を感下ける時に七月廿七日なりけるが阿
 佛坊佐渡國より遙々登山ありけるが高祖且悦び且驚き貴遠の齡九十に在さずやまかるに去る中
 成より五年の間は三度まで海山萬里を越て遠く音信たまひること生々世々のねもひでなるべ
 とありければ阿佛の複紗解ひらき清淨なる單衣取いだしこれの妻の千日が聖人へ縫ておこた
 る布施物なりとて奉りまた袈裟と法衣を置ならべ我餘命いくほどなり願ふは出家の員に入この
 法衣を着このけさを掛て寂光の旅立せんとれもふなりとありければ大士もほとく喜びたま

ひ剃髮の儀式をととのへ初て日得聖人とめされければ生前の本懐を遂たりとてしばし滯留し秋
 風たぬそのうちにとある故徒弟を添て佐渡に歸を送り給ひけり高祖大士も去年十二月大晦日
 の夜より御腹なやまきうら臥在す程ならねどにかく春より夏かけて御心悵鬱しくありける
 にぞ四條賴基御業を奉りその験にや六月頃より追てみこしる延やかにこのはと全く恒の御心地
 にならせ給ひ御喜悅の多數御書したため能便りもがなと思す折から金吾賴基より价を奉りけれ
 は其書を探て御覽あるに昨年六月このかた流浪の難義も法の爲と髮年月に還て信心も彌増たる
 に諸天の御はからひにや主君江間遠江守先非を悔我を召返し再び開く家の運もとの領知より土
 地肥てゆたかなりと聞へたる佐渡井筒田の莊信州殿岡甲州内船郷をも賜ひたり今生に此福を得
 未來得脱を得る事皆これ聖人の賜物なりとありければ其書通を本尊の御前にさしげて喜悅給ふ
 こと大かたならず返書を書て价をかへし給ひける内船は常國八代郡にして今に寺あり正住山内
 船寺と傳へたり高祖は嬉しきまゝ其訪來人ごとに賴基が身の安堵をかり給ひ御悦びのうちに
 年暮て弘安二年己卯正月春の始の御祝として上野殿より餅九十枚薯蕷五十本を奉る又御器一具二
 十盞六十秋元太郎よりまゐらすれば四條賴基の妻女より鷲目三貫文を供養す其外遠近の檀越よ
 り春の壽いはのべ客に應對价に返書のをけき春もいつしかくれ散櫻戸におとづれて遠藤九郎
 守綱その父阿佛坊日得三月廿一日に身まかりたりとて其遺骨を頸にかけて登山しその遺言に任

せて塔を此山に建たり大士厚く追善の法會を儲涙ながらに塚原の雪の底に我が命を繼たまは
 りし舊恩に報じ給ひける遠藤守綱も大士の法弟となり父の靈所にて剃髮し阿佛坊日滿と號す佐
 渡に歸てその家を寺とし蓮華王山妙宣寺と呼父日得を開山となし第二世に日滿住職と爲たりけ
 る時に武藏國豊島郡金龍山淺草寺の住持寂海法印本覺坊河内坊といふ二人の隨身に些の行李を
 持たせ遠く此身延山に訪奉りはじめて高祖に對面なし膝を摺頭を低身の素生をのべ偈言やう我
 さいつころ隅田川の渡りにゆくりなく下總なる富木入道に値まらせ我が天台宗こそ實に法華
 の正統なるぞと難じかゝりし我が問に入道頭うちふりて否々それはと詰返す數番の論に舌の根
 すくみ驕にさゝれし小鳥のごとくいひかへす理もあなかしこ在家の御身かくのごとしその御師
 の聖人こそ見へまほしと告ければ入道もよろこびてさればとて書てたまひえ紹介の書翰はこゝ
 にありけりとさし出しそれより大士の化導を受世の嘲も物かはとそまゝ改宗して名を日寂
 と賜ひければ隨身の弟子もこれに感じともに大士の徒弟となりて日増日可と召れる日寂はこ
 れより歸國して淺草寺の程近き端場といふ地に寺を建深榮山長昌寺とて今日の邊榮へける霜な
 く庭もやゝ荒し落葉ふみわけ訪人も多かる中に別てけふ江川太郎左衛門吉久豆州韭山より遠く
 おどなひ奉り布施をさゝげて聖人の安否いかいと尋ね給ふにむかし和泉にありし時おもはず途
 中に因みたる昔語りて夜寒を忘れこゝに日數をかさね給ふにそ高祖大曼陀羅を書て授け法名を

日久と記したまふその四大天王の畫は大藏の筆なりける又梁牌の本尊を授賜ふ年月を記さず裏
 に一首の歌

霜柱氷りの梁に雪の桁さきゆく水に火こそ消けれとありこれを世に鎮火の本尊と稱す後年
 韭山に本立寺を草創ありけるかくて短き冬の日池上より鷺目一貫文淺黄裏の小袖一襲帶一筋
 栗すこしいさゝか寒中の伺をなす南條殿よりは白米一駄を供養とす細谷川の氷りても下ゆく
 水の年月はしばしと止る堰もなく弘安三年庚辰正月五日のことなりさ相俣村なる正右衛門が妻
 三歳ばかりなる幼稚を抱て御庵室におとづれて去る年の九月夫婦に死別れ人間の盛りも花の一
 時にて頼すくなき世をおもひ我も此兒も聖人の徒弟になり夫婦の菩提身の佛果を願んとありけ
 れば大士憐れみてその髻を切て日佛と法名を賜ひ此山の麓に栖て折々に御衣を洗ひ清め御法衣
 の縫ひをつりて事へたてまつりけるその幼兒は是好磨とよび給ひ後出家して日了といひ大士
 入滅の後西郡中野村は母の在所なるをもつて母と共に其地に住で妙了寺を開基し又相俣なる父
 の家を寺となして正慶寺とは名づけしとなり茲に日法聖人この頃身延山にありて一夜御菴室を
 立出給ひしに溪間より光明赫々とさしければ立寄てその光りの根を尋給ふに檜の太木にあり
 ければ我久しく佛像の彫刻を廢たれどもかゝる靈木を得て止事かはと大士に許容を受て高祖の
 尊像を彫み奉れり今身延山栖神法窟の尊像是也さても鎌倉に在ては大元蒙古の賊船定て寄來る

べきやの評議に依て筑前博多をはじめ海岸の城を修復せしめ山陰山陽兩道の大小名をもつて京都の四方を堅め東山北陸の軍兵を越前敦賀に屯し追々大軍を九州にさし下し防禦の備に他事もなく世上の心騒立て心ぶむうちに年も暮弘安四年辛の己の春高祖御齡六十歳耳順ふと言ばいふ世のうきふしの躰相を聞もいふせき休憩望深山は春も雪ふかし如月中旬黄鳥の初音めづらに窓の戸をさしのぞき給ふに思ひかけなき京都東寺の眞廣法印雪踏分て見へけるにぞ現ならず思召三十年前京都遊學のその時に厚く交りたる好身もてこゝに本門の大戒を授たへて久しき其後の宗門弘通の物語りにしばし月日を送られける大蒙古の一亂もとにかく今年は過すべからずと上下萬人心を痛めけるに鎌倉中の弟子檀方歸依の信者はよるこびて法華敵對の現尉唯今ならんと誘りがにいひ罵者あるよし遠くこれを聞給ひさては不覺の者共かなかゝる國の煩ひも日本國中の諸萬人諸宗の醉に本心をうしなひ法華經の妙樂を用ひず災害こゝに迫りたるなり大聖世尊本化の菩薩も子の病を親の看が如くさだめて不便なりいたわしと思すらめ然るを我が大法の實相に誇りはしたなくも市中に物を賣が如くに噂する事佛天への恐れ國土への憚りあり去る文應元年の七月より言べき事は我はやいへも今さら人に何をかいはんもし路頭に蒙古の事を私語ものあらば永く師弟の縁を断るべしと六月十六日この趣を書て一通の廻文となし熊王四郎にもたせて鎌倉中の檀方にぞ觸たりける誠に佛法を知者は世法に達といふ此御心添こそ尊けれさ

ても天下の人の思慮に違はず七月朔日霧も曇り一沖合にこれと定かに見かねども數萬の軍艦日本さして押來る此の事いやくも京鎌倉も註進す四國九州の諸軍勢の筑前博多表に出張して今やと扣へ待かけたりさる程に大元蒙古の大將軍宋朝二百年の武勇を一戦にとりひびぎ大唐四百餘州を切垣らげ其勢氣も乗じて日本を伐取らんと究竟の精兵二十四萬餘人軍艦四千餘艘に取乘てれよせける其海上船の備を見るに大舶を船と艦とかけならべもやひを入れて通歩の板を渡し陣ひき並べ波の上も平なる路幾條も出來てこれより馬の轡を揃へて陸に立向んどの結構なりかくのごとく五嶋より東博多の浦まで海上四圍三百餘里俄に陸地となりて鐵城を構へたり我が日本の陣取の博多の濱邊十三里の間石の堤を高く築き前敵を防ぐが爲も切立となし後は味方の爲も平らかにして懸引自在なりと思ふ處に敵の船には結棒の如き數十丈の柱をねりたて其上の横木に人を居らしめ望遠鏡をもつて見渡すゆる日本の陣中眼の下まで毛髮の尖も算つべいかく合戦いかいあらんと評議區々の處へ彼の賊船より山嶽も崩るゝばかりの響をなす大鞠のごとく鐵丸飛來り霹靂く事ればただしく此の鐵丸一度も二千三千うち出すこれに當りて死するもの幾萬人そのうへ城門櫓も火燃つきて打消にいとまなく唯畏れたのゝくばかりなり斯ての勝利思京なるとて松浦の一黨一千餘人その夜浦つたひに夜討をかけたけりける其志といさまじけれども

味方のわづか九牛が一毛たとへば千駄の薪の燃立たるよ一杯の水をそそぎたるがごとく敵をも
 多分討取たれども終に皆生捕れ鉄の索にて彼の船端を縛らべて日本勢に見せたりければ重て
 戦んといふものなかりけるそれより大元の賊船破竹の勢ひも乗門司赤間が闘より長門周防にと
 りか、らんと見へたるは誠に盤石の下に鶏卵を置よりも危かりしありさまなり時に八皇九十代
 宇多天皇慮を苦しめ給ひ鎌倉に勅命有て將軍惟康親王日あらせりて御進發には定りたれども
 日本の危急人力に協はず兼て數ヶ度の忠諫なれよびたる正法の行者日蓮聖人に護念の力をから
 んものと遠く身延山に仰ありけるよ高祖大士國恩を報下奉るの唯今なりと長六尺五寸幅五尺
 五寸の大旗兩面に月と日を志たしめ四方にの四大天王八方に八大龍王を畫しめ中央日月のうち
 輪圓具足の大曼陀羅を御染筆ありてこれをさしげ給ふ宇都宮貞綱先陣として軍勢三万余人此
 御旗をさして九州にむかひ筑前博多の山上雲をつらぬき怨敵退治の御旗曼陀羅翻として朝
 嵐ひひるがへりいとも尊く思はれたり時弘安四年八月朔日一天五色の雲みだれたつよと見
 へが颯風俄に吹起り山を拔擧を飛ばす震動雷電大元蒙古數萬の軍船風に木の葉を卷が如く浪
 に搖當船と撲合四千余艘の賊船も見るが中々微塵に碎け軍卒も大半は波の濺屑と溺れ死し草薺
 干闥吳萬の三八大將も波に漂ひ流るゝを生捕ける翌二日の早天晴海れだやかに成ければ三
 日廣間を揚て舞臺といひ奉り御代萬々歳と祝しける鎌倉の將軍出馬に及ばず九州の軍勢又

血塗すして十二分の勝利を得たる事ひとへ法華經の威力日蓮聖人の守護なりと將軍家も御
 感悦有て此の御旗を宇都宮貞綱に預けさせ給ふそれより池上宗仲もつたへて今の兩面を別て月
 の御旗は身延山にねさめ日の御旗は武州本所押上天松山最教寺にあり是他國侵逼の難を防ぎ
 まひ一本朝萬年守護の御本尊と稱し奉るなり是に依て鎌倉の檀越より御經の利益のトめて天下
 にかくれなきよ一を祝し布施を献し喜びを演るもの多かりける九月二日波木井六郎實長今年六
 十の賀を祝ふとて大士を其邸宅に請待し奉り一門奉て賑ひ喜び實長今日より家督を嫡男彌六郎
 長義にゆすり誓を切て入道し法寂日圓と名づく大士自ら我小像を彫り波木井殿に授け年頃の恩
 を謝して八日の朝暇を告て身延山よかへり給ふ此頃よいたりて法運大ひに開け山また山の嶮
 一かる身延の澤は高祖を訪奉るもの絶間なく日々の參詣貴賤男女星と列なり雲と布御庵室の
 處席諸人居並んで錐を立るの坐もあらざりければ是非なく地を坦し石を居新に六丈四方の堂を
 いどなみ初て身延山久遠寺と稱し十一月二十四日を以て開堂の供養を行れけるにぞ遠近の參詣
 群集をぞ成たりけるかくて高祖大士常富木殿の舊恩を忘給はず常忍の像を手自御彫刻ありて
 明も安置し朝夕も尊敬を加へたまふ常忍もこれを見ていと勿体なきとよれもひみづから大士の
 尊像をささみ平日禮拜怠り給はずこれを互交の尊像とて今猶現存せりとぞ法門無盡かぎりありて
 衆生教化にいとまよ一往を送り來を迎へ春去夏も夕顔の花もまほみて宵の袂冷しき文中句

高祖の御身に病を發し、滂氣色は常に替らせ給ひねども御食事もや、減下起居何となく御容休輕からず見ゆるよど四條比企をのりめとしてこれを聞て追々に登山、御動靜を訪奉るに高祖大士思召とやありけん池上宗仲の宅も入て養生をせばやと仰有けるよと遠路の山河いかがあるが波木井入皆々繁下つらひけれども折角の御意に背くも恐れ多しとて其要意取々にありけるが波木井入道、次男彦次郎實繼を伴にさへ兼て愛給ふ遺物の良馬も、望にまかせられよて送奉る法子檀方多く附添まゐらせ九月の八日齋食を召て程なく身延山を御出立その夜の下山兵庫が宅にやどり玉ひ九日の鰍澤ある大井莊司のもとと御止宿十日には曾根の次郎が方に宿し十一日黒駒十二日河口の梅屋上房に止宿十三日吳地の遠山藤學がもとに御入十四日駿州竹の下鈴木繁八に止宿十五日相州關本下田五郎左衛門これみなるより歸依の方々なれ御意のうちに永き別れとねがひめりみこゝろふ、其供養を受玉ひ十六日平塚長谷川氏にやどり玉ふ其跡松雲山要法寺といふ十七日瀬谷の妙光寺も入せ玉ふ住持文教阿闍梨宗旨を改めて法弟となる名を日成と賜ふ十八日午の時に池上に著玉ひ十九日御書を御去た、めありて難處多かる此程の旅路彦次郎實繼厚く介保な、玉ひ馬も亦よく我が意にかなへり彼是御心づくの鴻恩生々忘れがた、我病愈ばりてたく面會とべ、まか、老病こゝろもとなしたとへ我何處にて死侍るとも墳をば身延山に建さへ給へか、と誓て彦次郎の歸る便宜よ波木井入道に贈り給けり廿三日大曼陀羅を對

翁宗仲に與へ給ふに宗仲つしんでこれを受けて言やう去る建治元年我が邸のうちに本門寺を建立なしたれども開堂の供養を遂聖人御全快の上は一會の御法要を願奉るとありければ大士も今般の病氣はもはや定業にして愈べしとも覺へず僥倖けふは食もすゝみいと心も晴やかなるはと仰ありて洪鐘を鳴え法鼓を擗てありければ此程大士の病ひを訪てこゝに聚る僧俗男女その大堂に居並んで整々と見へかける大士強て起出給ひ沐浴盥漱御履を召て堂に昇り誦經唱題なし給へば大衆も同音に和し奉る夫より高座に登り立正安國論を講釋なし給ふ一會の佛事式法の如く行れ皆々宗蓮萬歳を唱へけりかくて大士は疾病いよくおもらせ給へども御病牀にいまして法門を談じいさゝか例にかはらせ給はず側をかへりみて我が死するときは大地震動すべし左もなくは我は死なじ各心を勞したまふなどありて十月三日期を召て立像の釋尊立正安國論御免狀二通御紀念にまゐらすよし仰有て又日昭日朗日興日向日頂日持の六人を六老僧とさだめ我が入滅の後はこの六人を我が如くに仰ぎ事へよまた我が遺骨は身延山に納めて六老師輪番にこれを守護すべしと左右を召てこれを仰遺したまひ又御法子檀方へ御遺物を願け與へたまはんとして日興師に筆をとらせて一々に是を記させ給ふそれ彼と冬の日影の移り易くけふしも十一日諸佛檀越一寸の間をも惜んで御側さらすありけるが高祖大士は經一層一と御病床ちかくめしよせられおもき御枕を擡げ右の御手をさし伸てその頂髪を三度まで搔撫給ひ鳥の將に死ぬる

時その鳴聲悲し人の將に死なん時そのいふ言よしといへり汝今年十四歳つゝんて我が遺命を承
 諾れ我建長五年夏の頃初めて本地難思の妙法を弘通し日本國の一切衆生を救ひ得させんと誓
 願も今すでに満足すといへども我一期の間鎌倉殿に諫言三度におよび伊豆に三年佐渡に四年住
 處を追れしこと二十餘度そのうへ安房上總武藏諸國の教化に年命たらず唯今入滅なすにつけ心
 残るは京都の弘通いまた此御題目一天の君の御耳に觸奉らず汝これより日朝を師と頼み學問修
 行成就せば華洛に登りかならず本化の妙法を天聽に達しくれよかしと懇なる御遺戒に經一塵
 は御手にすがり一聲よと泣しつみ畏み告す詞さへなみだに曇る朝時雨袖ほしあへぬ日朝日向
 左右より御介保こゝろを込て夜晝とも御側にある僧俗男女御題目を唱へつゝ送る日脚も短くて
 けふ十三日の朝卯の時頃一搖ゆるぐ地震のひびきに各御病牀に馳聚りけるに高祖大士は安然と
 して一座にしめし宣ふやう今後五百歳の時を得て宗速ひらく法の華・乘妙法蓮華經といふは大
 聖世尊五百塵點刹の間本果の妙行にして我等衆生一念信力のうちに其功德を讓受るこれを
 即身成佛といふもし信心弱くして我が教へに遠ひなばこれまで永く六道の苦艱にも懲す又惡道
 に沈みやせん其時日蓮を恨み給ふなと御聲しつかに御教導ありて御側に命てかねて御染筆の曼
 陀羅を掛させ給ふ後の世に臨滅度時の御本尊と稱し奉るはこれなり斯て幽微き御聲に喜量品を
 誦み給ふにぞ大衆も一同に靜々と御經を誦證奉る御香爐の煙りたえ／＼に薫じわたり御次の

間の漏刻般々としてひいさ此辰の刻にやとおぼゆる頃慈顏御笑を含給ひ寶體眠るが如く大涅槃
 に入給ふ時に壽算六十一歳壬午に生れて壬午にかくれさせ給ひけりかくて日昭聖人南無妙法
 蓮華經と唱へ揚たまへば僧尼俗子のわないだめく御題目を唱へ奉り地を走る獸林に群がる禽も
 五十二類の愛別を嘯鳴このとき池上の満山諸木に花發いて法性の春を表すこれ我が宗門御會式
 に花を挿由來はこゝに始りける十四日戌の刻寶棺に収め奉りその夜子の上刻御出棺御葬式の順
 列は朝慶御華皿をさしげ次郎三郎大續火を器赤白二本の大蓮華は上野殿に四郎次郎又赤白二流
 れの御旗は池上右衛門大夫中田左衛門尉御香爐は富木入道鏡鉢は太田左衛門入道花瓶は南條時
 光御文机は富士四郎太郎御隨身の法華經は四條頼基御隨身佛は比企熊本御沓は源内三郎是より
 左の方は日位日忍日持右は日保日實日法これより御寶棺御前は日昭御後は日朝御與脇は日高日
 興日合日秀日祐御天蓋は太田三郎明持御太刀は兵衛志御腹巻は椎池四郎御馬は熊王四郎これ
 を牽行列徐かにして結界四門の西より入て東門より出て南門に入る三巡四逡式のごとくそれ
 より寶棺を茶毘所に安し火を舉て梅檀の薪にうつす此夜月あきらかに星きららどき沙羅雙林のひ
 がしもこゝに思ひ出られ十六日御眞骨を拾採て寶瓶に納め檀上に安置して初七日の御法會まで
 法のごとく修行ありける彼の大聖釋尊は靈鷲山の良位跋提河の邊純陀が家に入滅なし給ふ此日
 蓮大士は身延山の良位に當り多摩河の邊宗仲が宅に滅度なし給ふ古今かはらぬ大涅槃とぞおも

はれける斯て廿一日の朝法弟檀越一同御伴にて御眞骨池上を御出立ありて身延におもむき給ふ
其夜は相州飯田に御止宿廿二日竹の下廿三日駿州車返廿四日上野南條氏廿五日身延山に御着
ありければ波木井入道父子喪服を着して御出迎に及ばれ廿六日には二七日の御法會執行あり甲
駿二ヶ國の檀越信者雲のごとくに群て拜み二月二日御中陰の佛事ありて在家の男女皆が涙なが
らに山を下る六老僧は御廟所の邊近く各庵室を構たまふ日昭聖人は不輕院今の南の坊日朝聖人
は正法院いまの竹の坊日興聖人は本應院今の窪の坊これなり又四條基は今年家督をたて、其身は主君
院今の山本坊日持聖人は本應院今の窪の坊これなり又四條基は今年家督をたて、其身は主君
に暇を請身延の山内に端場坊をいとなんで茲に籠りこれより生涯山を出ずして此坊舎に終られ
ける明れば弘安六年癸未正月廿三日百箇日の喪終て各相議して輪番をさだむ正月日昭二月日
朝三月日傳日賢四月日頂五月日持六月日辨日忍七月日合伊賀八月日法日位九月日興十月日實日
保十一月日向十二月日秀日家と相しるして此月まづ日昭聖人御番をはじめ給ひける今年十月池
上に一周忌をいとなみて高祖在世のとき御書を賜りしものは其御眞跡を打參して目錄に入るべ
きよし諸國の檀越に觸渡し各持ち聚りてこれを記するすに御書百四十八通四十卷として録内とい
ふ又此時に漏たる御書猶多しとして三回忌御法會のときまた池上に聚集とて御書二百五十九通
二十五卷としてこれを録外といふあわせて六十五卷御書四百七通これを御妙判と稱して世に傳

ふ嗚呼大ひなるかな本化の智德其法いよく實なるがゆゑに其位いよく卑く身は日本國東海
の磯村に海郎の子と生れ佛勅に任せて唯一乗の妙法を一閻浮提に輝かせ給ふ高祖前に高祖な
く高祖の後に高祖なし實に天四海佛門の棟梁衆生救護の大導師なり大士在世のとき左右に語
て宣ふやう我たとひ富縷那が辨を振ひ目連が通力を現すとも其言ことの當らずその詮なかるべ
し今言おく事の後に合はこそ世の人我を信すべし文應元年の立正安國論に勸へたる三災七難も
みな一々符合したりされば身は下賤に生れたれば人は罵り惡むとも持つ處は尊き法華經なれば
終に弘まるべししかれば後年に及び我が屍に利益ありて人の渴仰せん事今の鶴が岡に鎮座あ
る八幡大菩薩のごとくなるべまとい仰殘されし録内十四の卷の金言虚しからず大士の十三回忌辰
に當り經一曆廿六歳今は龍華院日像と名乗高祖の遺命を頭上にいたし永仁二年四月廿八日京
都に登り禁裏日の御門にたちて朝日に向て初て御題目を唱はじめ説法弘通四十年の後御弟子大
覺大僧正妙實その後を繼給ひ時文和元年六月廿五日人皇九十九代後光嚴帝御震翰を染させ給ひ
日蓮大菩薩と勅號ありて僧正妙實に下賜りけるこれ高祖大士滅後七十一年に相當る我が屍も
今の八幡大菩薩といはるゝやうに崇めらるべしと仰死されしこと茲に符節を合せたるは誠に本
化上行の御再身兼知未萌の大智識として思合されける御靈廟は舊身延山庵室の地にして八面の
御堂のうち御石碑あり銘は日昭聖人の御筆なり又御眞骨堂には水晶八角の玉の瓶四方の四大

天王は後藤祐乘の彫にして七寶の瓔珞珊瑚の天蓋に莊嚴し御眞骨は鮮明に其内に拜れたまふ何ゆゑに碎きし骨の名残ぞと思へば袖に玉ぞ散けると元政聖人の詠給ひしも殊に尊くおもはれける當山十一代行學院日朝大聖人伽藍を今の地に移し二十三間の祖師堂を造立し山門仁王門五重三重二重の大塔本堂位牌堂經藏鐘樓また通本橋を渡り唐門を二千疊敷の大方丈大書院三十六棟費をならべ御眞骨堂古佛堂三箇所の御寶藏その外諸州の廣大舉るいとまなし塔中の坊舎二百七十坊別に西谷檀林を構へたり當山の結構すら斯のごとし諸堂の本山國々の本寺あはせてこれといはゝその數量知るべからず今大士入滅後五百有餘年日本一州法華の寺院——餘におよぶまことに本化六萬恒河の砂の算限りしられぬ宗門御繁榮は末法萬年動きなき皇國の柱石とはしられけり

撰者曰祖書録内録外結集の事は別に評論あれども此書は唯古來の傳説を折衷し御一代の編作を旨とするなれば結集の一事は世間普通の説に任すのみ讀者遺憾と爲す勿れ

日蓮大士眞實傳終

明治四十二年九月廿五日印刷 (日蓮大士)
 明治四十二年十月一日發行 (定價四十錢)

編者 鈴木源四郎
 發行所 東京市淺草區北元町十二番地
 印刷者 川崎清三
 印刷所 東京市淺草區南元町廿六番地
 同所 大川屋印刷所

不許複製

專賣所 聚榮堂 東京市淺草區三好町七番地
 大川屋書店 (電話下谷一五七三番)

ささきく著 研山書

花残うらみの葉櫻

洋装美本
定價四十五錢
郵税六錢

十返舎一九著 北澤樂天口書
小林清親中畫

東海道中膝栗毛

洋布製模様入
長形美本
定價五十一錢
郵税八錢

ささきく著 研山書



洋装美本
定價三十五錢
郵税四錢

岡本半溪翁先生著

● 木草竹花 盆栽培養法

● 岡本半溪翁先生著



木村文法翁先生著

● 築山庭作秘傳

全一冊

菊判洋裝美製本

紙數百四十余頁

正價金三十錢

郵稅四錢

全一冊

菊判洋裝美製本

紙數百五十余頁

正價金三十錢

郵稅四錢

全一冊

菊判洋裝美製本

庭園圖卅余种入

正價金三十錢

郵稅四錢

259
619

